

## 神の国の性質

(マルコ4・26～29)

## 一、テキストを巡って

マルコの福音書4章26節から29節を開いています。このテキストの並行箇所は、マタイの福音書にもルカの福音書にもありません。マタイとルカが、マルコを底本にしてそれぞれに福音書を書いたと考えるなら、マタイとルカはこのテキストを採用しなかったということになります。なぜでしょうか。マタイは、主イエスが語られた神の国のたとえを多く収録していますが、きょうのテキストは却下したのでしょうか。その替わりに取り入れているのが、毒麦のたとえです。ある人が自分の畑に良い種を蒔いたところ、しばらくして芽が出て実ると、麦に似ている毒麦が現れたというのです。理由は、人々が眠っている間に敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った立ち去ったからでした。おそらく、このたとえはマタイが所属していた教会の状況に合ったのでありましょう。そう考えますと、種が地に蒔かれて放っておくと、芽を出し、おのずと実をならせるといふ、きょうのテキストは、マタイが置かれていた教会状況に合わなかったのかも知れません。と、こんなふうに聖書を読んで行くのも面白いものです。

マタイ、マルコ、ルカの福音書に載っている神の国のたとえは様々です。ということは、神の国の性質を知るためには一つのたとえだけでは不十分であると教えられます。すなわち、神の国の性質には多様性があります。したがって、神の国のたとえを一つだけ取り上げて、「これこそが神の国の性質である」と受け取るのではなく、どのたとえを取り上げたとしても、「これは神の国の性質を表す一面である」と受け止めるのが賢明です。

## 二、成長する種のとえ

きょうのテキストに耳を傾けてまいります。26節をご覧ください。《またイエスは言われた。「神の国はこのようなものです。人が地に種を蒔くと、数形で、しかも定冠詞が付いています。蒔く」といふことは、マルコは、キリストの福音を指して語ったのかも知れません。その可能性は大きいのです。このたとえを語ったのは主イエスですし、主イエスが語られた時はおそらくヘブル語だったでしょうから、今私が申し上げたことは、「マルコによるメッセージ」ということになります。

その続きを見てまいります。27節です。《夜昼、寝たり起きたりしているうちに種は芽を出して育ちますが、どのようにしてそうなるのか、その人は知

りません。》とあります。種、すなわちみことばは、蒔かれると芽を出して育ちますが、どのようにしてそうなるのか、私たちには分からないのです。これは日本国のように、トラクト配布をして、あるいは出会った人に信仰のことを語ったとしても、なかなか芽が出ない土壌に置かれている私たちには、励ましになるみことばです。

次の節を見てまいります。28節です。《地はひとりでに実をならせ、初めに苗、次に穂、次に多くの実が穂にできます。》とあります。《多くの実が穂にできます》とありますが、元のことばは、「穂の中に、実が満ちる」です。これは、生物学的に合っているか否かの視点で見るとは、主イエスを始め、当時の人びとがそのように受け止めていたということなのです。

## 三、おのずから

28節に《地はひとりでに実をならせ》とありますが、口語訳は《地はおのずから実を結ばせるもので》です。種であり、神のことばである福音は、蒔かれると自動的に成長する性質を持っています。私は今回のテキストを読みまして、旧約の伝道者の書11章が思い起こされました。11章1節に、こうあります。《あなたのパンを水の上に投げよ。ずっと後の日になって、あなたはそれを見出す。》とあります。これを、キリス

トの福音を水の上に投げよと捉えたらいかがでしょうか。《ずっと後の日になって、あなたはそれを見出す》というのは、自分ではまったく予期しないところで、その人が救われるかも知れません。ですが、これでよしとしてしまったら、不十分と考える者です。きょうの聖句に戻りますが、28節です。《地はひとりでに実をならせ、初めに苗、次に穂、次に多くの実が穂にできます。》とあります。この聖句が語っているのは、私たちがみことばの種を蒔いたら、後は主にゆだねて何もしないということではありません。主にゆだねるとは、何もしないことではないからです。主にゆだねるとは、御霊の働きにゆだねることです。御霊の働きにゆだねるとはどういうことでしょうか。たとえば伝道者ヒリポは、主の使いが「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい」と語ると、すぐに立ち上がって出かけました。あるいは、主の弟子であったアナニアは、主から「立って、『まっすく』と呼ばれる通りに行き、ユダの家にいるサウロという名のタルソ人を訪ねなさい。彼はそこで祈っています」と語られると、当初は戸惑いましたが、従いました。

ゆだねるとは、御霊の導きに従うことです。御霊の導きに従うのは、重荷とはならないはずですが、むしろ、喜びと確信が伴うものです。